



## 22名の新入生、入学おめでとう！ 新1年生の道徳の授業を紹介します。

教材名：『挫折から希望へ』 - 弱さを乗り越え生きる -  
(生命、自然、崇高なものとの関わりに関すること)

### ヴァイオリニスト千住真理子さんの生き方から



1962年…誕生。音楽好きの祖父母の影響で、2歳からヴァイオリンを習う。  
1972年…全日本学生音楽コンクール東京大会小学生の部で第2位。翌年は全国大会第1位。  
1975年…NHK交響楽団と共演、12歳でプロデビュー。

千住真理子さんは、12歳頃から「天才少女」と呼ばれてきましたが、その陰での嫉妬やいじめ、学業との両立に悩んだそうです。高校生時代には、努力の繰り返しと「天才であり続ける」こととのギャップに心身が悲鳴を上げ、20歳の時にヴァイオリンから離れ、まったく触れることもなくなりました。

大学は、音楽大学ではなく文学部哲学科に進学。大学では、自分探しのためボランティア活動をしていましたが、末期ガンの患者達が生活するホスピス訪問で「最後に千住さんの演奏を聴けて良かった」という患者に出会い、奮起。2年間のブランクを経て、大学卒業後はプロへの道を志しました。

#### ……教科書本文から一部分を抜粋します……

「私は天才じゃない。」という叫びが、演奏に現れていったのもこの頃だった。まもなく私は、大きな壁にぶつかった。多くの人が注目するなか、次から次へと受けるコンクールにすべて落ちていったのだ。

千住はどうしたんだ？ という評判とともに、千住はだめになった、と言われ始めた。ステージに立つだけで手足は震え、頭の中は真っ白になる。聴衆の視線が痛い。世間の評判が怖い。プレッシャーに完全に負けている自分を認識した。私は自暴自棄になっていた。どんどんだめになっていく自分に、もっと落ちていけ、ともう一人の自分が言う。(略)

そんな思いで日々を過ごしているときだった。普段から口数の少ない父が独り言のようにぼそぼそと何か言い始めた。「ダイヤモンドっていうのは、磨かないと光らない。……毎日毎日その石がダイヤモンドだと信じて磨いたら、いつの日か輝いて、砂浜で埋もれているのを誰かがかならず見つけてくれる。」

吉舎校区では、一昨年度から、道徳教育の改善・充実をはかる研修指定を受け、小・中合同で道徳科の授業づくりに取り組んでいます。今年度も、吉舎小学校の小原智穂先生が校区内の全学級の道徳に入り、担任の先生と一緒に授業を展開していきます。生徒たちは、思考と交流を通して『道徳ノート(大学ノート)』に自分や仲間の考えを言語化しながら、生き方につながる「ものの見方や考え方」を深めています。

あなたはこれまでの人生で、あきらめた経験はありますか。

父はどういう思いで、その言葉(ダイヤモンドの話)を娘に何度も繰り返しかけたのだろうか。



千住さんが涙を流して患者さんに伝えた「ありがとう」には、どんな思いが込められていたのか。

- ◎ 努力を認めてもらえたという思い。
- ◎ 自分の思いが相手に通じた。
- ◎ 自分の進むべき道を示してくれた。
- ◎ 自分と同じようにつらい思いをしていた人を楽しませ、「生きてよかった」と思ってもらえた喜び。
- ◎ 今までがんばってきた自分が「だれかのため」になったという思い。生きる勇気や気力になった喜び。
- ◎ 自分には、父の言った通り可能性があると思われたこと。
- ◎ 続けてきたことには価値があるという思い。

弱さを乗り越えていくためには、何が必要なだろう。

- ◎ 努力し続けること。
- ◎ 初心を思い出す。
- ◎ 乗り越えた後を想像してみること。
- ◎ 目標を少しずつ高くすること。
- ◎ いろんな方法でチャレンジすること。
- ◎ 努力はいつか報われるという思い。



- 原石は磨くことで輝いていく - 自己を見つめ、仲間との学び合いを通して、見方・考え方を大きく広げていこう。